

応用生態工学会ニュースレター
Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)
2007年(平成19年)1月9日(月)発行

No. 35

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-5 第7麹町ビル 25号室
TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: eces-manager@ecesj.com HP: <http://www.ecesj.com/>
〔発行者〕 応用生態工学会(編集責任者:幹事長 江崎保男、事務局長 奥村興平)

Contents

1	はじめに	1
2	第10回大会報告	1
	(1) 総会報告	1
	(2) 第10回記念東京大会を終えて	2
	(3) 発表賞	4
	(4) 懇親会において「地域コーナー」開設	5
3	理事会報告	6
4	幹事会報告	8
5	委員会報告	8
	(1) 会誌編集委員会(拡大)	9
	(2) 普及委員会	10
6	クレメント・トクナー博士、 日本滞在報告	10
7	行事報告	11
	(1) 北陸現地ワークショップ in 富山	11
8	会誌編集委員会からのお知らせ	14
9	新任ごあいさつ	14
10	新刊紹介	14
11	今後の行事	14

1 はじめに

・来年度大会日程決定!

来年度平成19年(2007年)の大会は、名古屋において9月15日(土)から9月17日(月)の日程で開催されることになりました。主な会場は名古屋大学(東山地区)を予定しています。

琵琶湖、北九州に続く3回目の東京以外での大会であり、さっそく辻本副会長が牽引者として準備検討を始めました。(事務局)

2 第10回大会報告

(1) 総会報告

事務局長 奥村興平

2006年9月30日(土)16:30~17:20に第10回総会を開催しました。まず冒頭で東京大学 知花武佳氏が総会議長に選出され、議事進行が行われました。以下に主要事項の報告を行います。なお、

総会資料は学会ホームページに掲載しています。

1) 報告事項

平成17年度の事業報告として、一般経過、会員動向、実施行事、理事会・委員会等の会議、会誌編集状況などについての報告が江崎幹事長から行われ、承認されました。

2) 決議事項

平成17年度の決算報告が江崎幹事長から、監査報告が田畑監事から行われ、原案どおり可決されました。続いて2006年度(平成18年度)の事業計画および予算案について江崎幹事長から説明が行われ、原案どおり可決されました。

また、「総会の成立に定足数を設け、かつ委任状による出席を認める。」とする規約の改正が提案、説明され、原案通り可決されました。

(総会)

第14条 総会は正会員により構成され、次の事項を議決する。

1. 事業計画及び事業報告の承認
2. 予算、決算の承認
3. 理事及び幹事・監事の承認
4. 規約の変更に関する事項
5. その他理事会で必要と認めた事項

2. 通常総会は毎年1回、臨時総会は理事会が必要と認めるときに会長が召集する。なお、正会員は、正会員の10分の1が連名し、議事を明記して会長に臨時総会の召集を申し出ることができる。この場合、会長はその開催について理事会に諮るものとする。

3. 総会の議長は総会において正会員の中から選出する。

4. 総会は正会員の1/5の出席によって成立する。

5. 総会における正会員の議決権は各一個とし、議決は出席者の過半数によって決め、可否同数のときは議長がこれを決定する。

6. やむを得ない理由のため総会に出席できない正会員は、あらかじめ通知された事項について書面をもって表決し、又は他の正会員を代理人として表決を委任することができる。書面により表決した会員は総会に出席したものとみなす。

(2) 第10回記念東京大会を終えて

前事務局長 島崎由美(いであ(株))

(本稿は「河川」(社団法人日本河川協会)に寄稿した報告を協会の許可を得て再掲したものです：事務局)

<はじめに>

応用生態工学会は平成9年10月に「応用生態工学研究会」として設立され、本年度の大会が10回目となった。この大会を10周年記念東京大会として実施することになり、本年9月29日から10月1日の3日間に東京大学弥生講堂を会場に開催された。大会は1日目および2日目は研究発表会および総会の開催、3日目の10月1日は河川整備基金の助成を受けた記念シンポジウム(公開)の開催を全体プログラムとして実施された。

この機会に当学会の10年の歩みを振り返りつつ、10周年記念東京大会の内容を報告したい。

<研究発表会>

応用生態工学会(当時は応用生態工学研究会)の第1回研究発表会は設立総会と同時に開催され、自然共生研究センターや河川生態学術研究などが紹介された。研究や事例の発表を一般から募集して行うようになったのは翌年の第2回研究発表会からであり、そのときの発表数は16題であった。10回目を迎える今年度の研究発表会は口頭発表38題、ポスター発表43題の合計81題となり、発表数は年々着実に増加してきた。発表の内容も当初は河川あるいは水辺を対象とした研究や事例が中心であった。しかし、本年の研究発表は対象となる場合は溪流、干潟・海岸、農用地と広がり、また室内での実験、野外での実験、10年に渡る長期的な観察の成果、事業として実施した対策等の事例の評価など多岐にわたる内容となった。

<シンポジウム>

大会時に同時開催するシンポジウムは第4回大会から河川整備基金の助成を受け、応用生態工学の国際的ネットワークづくりのために5回の開催を目標に実施されてきた。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアなどから講師を招聘し、第8回大会(2004年)の5回目に韓国からの招聘で当初の目標を終了した。この間、海外における河川を中心とした環境の保全、再生に対する取り組みや研究に関する講演をいただくと共に、応用生態工学会による土木工学および生物・生態学の研究者、技術者の協働の取り組みを紹介してきた。さらに、

昨年の第9回大会では「比較応用生態工学」をテーマに、欧米とアジアモンスーン地域の気候、地勢、文化の相違にも焦点を当てながら、生物多様性保全の取り組みについて議論した。

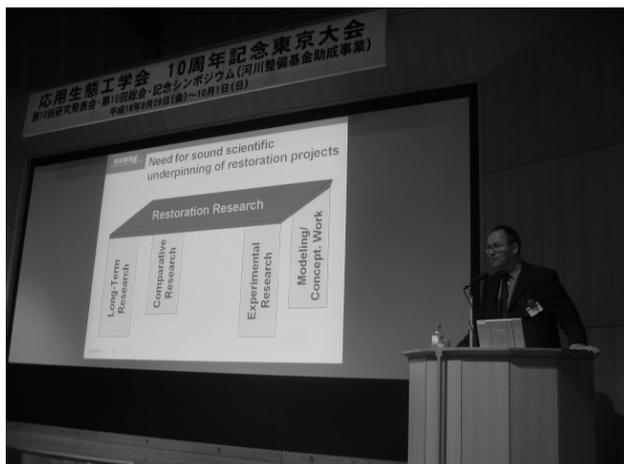


シンポジウム開会時

本年の大会では、シンポジウムは10周年を記念して「応用生態工学会の10年とこれから ―土木工学と生態学の壁はとりのぞかれたか?―」と題して行われた。別記(4ページ)のようなプログラムで進行し、10周年記念東京大会の名誉総裁にご就任いただいた高円宮妃久子殿下にお言葉を頂戴するとともに終日御臨席いただいた。また、関連の学会との交流を促進するため、共同で英文誌“Landscape and Ecological Engineering”を発行している団体のうち国内の学会である日本緑化工学会の森本幸裕会長および日本景観生態学会の中越信和会長を招き、シンポジウムに参加していただくとともに、祝辞を頂戴した。

川那部浩哉初代会長(琵琶湖博物館長)の基調講演では、当会発足前後の緊張した状況が紹介された。また、発足直前に発刊された「応用生態工学序説」(信山社)に述べられた「<応用生態工学>の目指すところは、端的に言えば生態学的知見を土木工学に応用するところにある」という考えに対して、一方的な関係ではなく相互浸透性を持つべきであるという考え、新たな境界領域が出来ることへの当時の期待が語られた。(当会ホームページに会誌「応用生態工学」1巻1号の巻頭言として全文を掲載しているので詳しくはそちらを参照していただきたい。)また陸水学の成立の経緯を紹介しつつ、10周年を迎えたこの時期に「応用生態工学」が境界領域としてとどまるのか、新たな自立した学問領域になってゆくのかを探るのは有意義であろうとの意見が述べられた。

招待講演者であるクレメント・トクナー博士の招聘は、1)応用生態工学で育ってきた研究者・技術者のために、現場で活躍している若い世代の方を招く、2)近自然河川工法が始まったスイスにおいて培われた技術の紹介を受ける、3)生物学者が簡単な水理計算も行うといった境界領域における新しいタイプの研究者の育成の状況を知る、などをねらいとして実現した。トクナー博士は Thur 川における河川の再蛇行化および Tagliamento 川の河川氾濫原の再生事業の例を紹介しながら Science と Technology の連携による研究や調査の内容および結果を紹介した。講演の後、会場からは氾濫原としての必要面積の算定についての合意形成、倒木の存在に対する日・スイスの考え方の相違、生態系サービスの評価についての質問、またご臨席の妃殿下からも国境を越える河川の上下流の問題などについて質問があり、活発な議論が行われた。



トクナー博士の講演

昼休みを挟んでのパネルディスカッションでは、これまで学会において各分野で役割を担ってきた5名がテーマに沿った話題提供を行い、さらに若手からの発言も含め、実行委員長の江崎保男幹事長のコーディネートにより議論が行われた。

谷田一三副会長からは河川における「生息場」＝ハビタットおよびその構成要素について、10年の間に共有化してきた言葉と未だ共通化されていない言葉および認識について問題提起があった。続いて竹門康弘理事は初代会誌編集委員長として、創刊から現在までの投稿報文をレビューした結果から、1)研究課題の多くが生態現象に偏っている、2)モデルと実験が少ない、3)研究対象が河川や水域生態系に偏っている状況を報告し、応用生態工学を生息場の科学として位置づけ今後も土木工学

と生態学が協働する領域とするべきであると提案した。さらに、中村太士交流委員長は2代目の会誌編集委員長として竹門理事とは別の視点でこれまでの報文をレビューし、将来の展望として河川生態系以外の生態系への取り組み、詳細設計図からの脱却(現場が考えながら事業を行う)と広域的な全体像を常に見据えたスタンスの必要性、事例研究の活性化、などが必要であることを説いた。続く辻本哲郎副会長からは、発足時に橘川前副会長が人のサロンではなく「学」を創るとの目標を示されたことが語られた後、学会のあり方を Melting Pot と Salad Bowl に例え、Melting Pot としての新しい学問領域の確立に固執するのではなく、それぞれの専門性を尊敬しあいながら Salad Bowl としての進み方もあるのではないかと意見が述べられた。最後の島谷幸宏理事からは、「応用生態工学栄えて日本の自然環境滅びる」ということが無いように、研究分野、研究内容、研究手法の固定化を防ぎ更に領域を拡大すること、そのために「生態学」と「土木工学」だけではなくもっと広い分野の人々の参加も必要であること、現場技術への貢献をもっと意識すること、職域の確立が必要であること、応用生態工学としての調査、研究、分析の作法のすりあわせが必要であることが提起された。



パネルディスカッション

若手としては第2回の研究発表会から参加しているという「応用生態工学の子」と言われる3名が今後の学会への期待について発言した。北海道大学の山田浩之氏は会員のうち大学に所属する者のデータを分析し、学部・修士生が少なく世代交代に不安があること、応用生態工学の分野で職を得た者がまだ少ないことを示した上で、各分野の名士の前で研究発表する緊張感などを語り、発表

しやすい雰囲気作りの必要性を述べた。また東京大学の知花武佳氏は、土木学会等でも環境分野の発表が増えている中で応用生態工学会としてのアイデンティティーを示す必要性に言及し、応用生態工学への活発な取り組みを大学研究室という島同士の連結のかたちで拡大してゆくために、若手同士の融合・連携が必要であることを述べた。最後に九州大学の河口洋一氏は研究発表会やシンポジウムの参加者に土木技術者の占める割合が少ないこと、現場で河川の設計を担当する人々にもっと積極的に参加してほしいことなどを述べた。

これらの話題提供および発言を基にした議論においては、メインテーマの「土木工学と生態学の壁はとりのぞかれたか？」については「おおむね取り除かれた」ということで合意された。「新しい学問領域として確立できたか？」についてはその必要性にまで議論が及び、現状では確立できたとは言えないが、「ハビタット」は土木工学と生態学を繋ぐ重要なキーワードであり、応用生態工学を経験した人がリーダーシップをとるべきであろうと当学会への期待が示された。学会活動は現場をどうサポートするかが目的のひとつであり、その機会があることが魅力であること、学会誌の発行と大会だけでは発展はかなわなかったであろうこと、「河川生態学術研究会」において同じ場でさまざまな分野の研究者が共に活動したことが有効であったことが確認された。また、このしくみに若手の参加を促す必要性についても意見が出された。

最後に山岸哲会長が、当学会には土木工学と生態学を専門とする研究者・技術者に加えて行政官が加わっており、このことが他の学会には見られない大きな特徴であること、河川生態学術研究会や貯水池生態研究会との連携で現場への応用にとってよいシステムが形成されていることを述べつつ、だからこそ襟を正して学会活動を行なう必要があることを述べてシンポジウムが終了した。

このあと懇親会が行われたが、札幌、仙台、北陸、名古屋、大阪、広島、福岡の各地研究会からこれまでの活動のパネル発表が行なわれると共に、各地の特産物の持ち寄りコーナーが設置され、大変盛況のうちに本年度の大会を無事終了した。
 <おわりに>

このシンポジウムで議論された内容などは学会誌「応用生態工学」の10巻1号(来夏発行)に10周年記念特集としてまとめられる予定である

ので、ご参加いただけなかった方も楽しみにしていただきたい。

別記

開会挨拶：小倉紀雄(10周年記念東京大会会長)
 挨拶：山岸哲(学会長)
 御言葉：高岡宮妃久子殿下(10周年記念東京大会名誉総裁)
 来賓祝辞：森本幸裕(日本緑化工学会会長)、
 中越信和(日本景観生態学会会長)
 基調講演：「応用生態工学研究会発足のころ」
 川那部浩哉(応用生態工学研究会初代会長)
 招待講演：「総合的河川再生プロジェクト：基礎科学と実務との連携」
 クレメント・トクナー博士(スイス連邦環境科学技術研究所：EAWAG)
 パネルディスカッション
 話題提供1「河川における土木工学と生態学－異質性と共通性」
 谷田一三(学会副会長)
 話題提供2「生息場の科学としての応用生態工学」
 竹門康弘(学会理事)
 話題提供3「応用生態工学が担ってきた研究領域と未知の領域－現状認識と新たな視点の発掘をめざして－」
 中村太士(学会交流委員長・前編集委員長)
 話題提供4「応用生態工学－生態学と土木工学の連携、その虚と実」
 辻本哲郎(学会副会長)
 話題提供5「私が期待する今後の応用生態工学」
 島谷幸宏(学会理事)
 若手からの発言(山田浩之、知花武佳、河口洋一)
 ディスカッション

(3) 発表賞

応用生態工学会では、発表や研究を今後さらに奨励することをねらいとして、2002年度よりポスター賞(①一般投票部門、②選考委員会賞)を、また、2004年度より口頭発表賞を選んでいきます。第10回研究発表会においてもポスター発表に対する投票と審査、口頭発表に対する審査が実施され、以下の発表が選ばれました。

ポスター発表賞については9月30日の研究発表会終了後に表彰式が行われました。

[ポスター発表賞]

<一般投票部門賞>

第一位 P-1 「流量変動と土砂還元が河床の礫挙動に及ぼす影響：ダムのフラッシュ放流と潜在的河床微生息場所との関連性の予見」
 小野田幸生(京都大学生態学研究センター)、
 遊磨正秀(龍谷大学理工学部)

第二位 P-9 「実験河川の流量増減による魚類群集

構造変化—異なる河道地形に着目して—
佐川志朗((独)土木研究所自然共生研究センター)、萱場祐一(同)、皆川朋子(同)、河口洋一(九州大学工学研究院)

第三位 P-24 「ダム湖からの動物プランクトンがダム下流河川食物網を改変する」

土居秀幸 (School of Aquatic and Fishery Sciences、University of Washington)、張光玆(愛媛大学沿岸環境研究センター)、中野伸一(愛媛大学農学部)

<選考委員会賞>

○ P-7 「試験湛水により自生地が水没した重要な種フクジュソウの10年間の個体群動態」

浅見和弘(応用地質(株))、影山奈美子(同)、松村雄(那須塩原市)、山下洋太郎(国土交通省東北地方整備局三春ダム管理所)

○ P-43 「水田を活用した淡水魚類の資源増殖に向けた取り組み」

神宮字寛(秋田県立大学生物資源科学部)、近藤正(同)、田代卓(同)、杉山秀樹(秋田県水産振興センター)

<選考委員会奨励賞>

○ P-22 「ため池における魚類および魚食性鳥類の生息場選択と環境構造」

山谷彩子(弘前大学農学生命科学部)、小西あや(同)、百瀬麦子(同)、東信行(同)

一般投票部門賞は、今後の工学と生態学の接点となる研究であり新鮮で興味ある知見が示されていることなどが、選定理由である。

選考委員会賞2題では(段落落とし解除)、長期モニタリングの有効性や実用性が重んじられた。

選考委員会奨励賞では、データの積み重ねによる研究の完成度の向上を強く期待されている。

【口頭発表賞】

今年は35編の口頭発表があり、10セッションの各座長と大会実行委員が下記の視点から審査して2編が選考されました。

- 研究発表の内容が独創的であるか。応用生態工学的に評価できるか。
- 研究の目的が明確であり、結果と結論はそれを反映しているか。研究内容が十分に論理的に構成されているか。
- 発表者は研究内容を十分に伝えることができたか。
- 発表者は質疑応答に対して十分に対応できたか。

8-3 「千葉県谷津田域におけるドジョウ個体群の遺伝的特性:マイクロサテライトDNAマーカーによる分析」:発表者:小出水規行((独)農業・食品総合産業技術総合研究機構農村工学研究所)

【選考理由】

生態がよく判っていない里川の指標種のひとつであるドジョウについて、遺伝マーカーを使用して個体群構造や移動生態の解析に取り組んでおり新規性がある。今後、遺伝的解析を環境再生の現場にも適応できる可能性が期待される。

10-3 「溪流魚の人工産卵場造成技術の効果的な活用方法」:発表者:中村智幸*((独)水産総合研究センター中央水産研究所)

【選考理由】

小規模溪流における環境改善手法とその効果を、それにかかる費用を考えながら検討したことが評価できる。極めて応用生態工学的アイデアの内容の発表である。

(4) 懇親会において「地域コーナー」開設

現場報告活動活性化小部会:高橋和也
応用生態工学会が設立され10年が経ち、会員数は1000名を越える規模になりました。そして、会員は、北は北海道から南は九州まで日本各地に広がり、今では、それぞれが地域の特徴を生かしたセミナーやワークショップ等独自の活動を行っています。大会は全国の会員が一同に会し、意見や情報を交換することができる絶好の機会といえますが、発表会場だけで議論するには時間の制約が



山岸会長と若手との意見交換

あります。そこで、懇親会を有効活用し、今まで以上に懇親会を意見・情報交換の場として機能させることを目的として、懇親会会場に「地域コーナー」を開設しました。当日は札幌研究会、仙台

研究会、新潟・富山・金沢研究会、名古屋研究会、大阪研究会、高松研究会、広島研究会、福岡研究会と各研究会が本コーナーの趣旨に賛同していただき、これまでに行ってきた活動内容や学術研究を紹介したパネルを持参しました。また、10周年記念東京大会を契機に、東京研究会が結成され、今後は関東地域に根ざした独自の活動を展開させたい旨、活動方針をパネルにて紹介していました。地域コーナーは、懇親会メイン会場の隣の部屋、東大農学部食堂の中庭側の部屋に設置されましたが、懇親会も半ばを過ぎた頃から、多くの会員がメイン会場から地域コーナーへと移動され、各研究会のブースにてお酒を交わしながら和やかに意見交換を行っていました。

懇親会に御臨席された高田宮妃久子殿下も研究会のブースを回られ、各研究会の活動について熱心に耳を傾けてくださいました。各研究会にとっては今後の活動の励みになったことと思います。地域コーナーには、パネルとともに各地の物産品も用意されましたが、多くの方が地域の味に舌鼓を打ちながら、終始笑い声も絶えることなく、それぞれの方が思い思いに意見を交換され懇親を深めてくれたものと思っています。

懇親会の最後には、特に、熱心に活動を行っている研究会に対する表彰が行われました。皆さんの投票の結果、新潟・富山・金沢研究会(15票)、名古屋研究会(11票)、仙台研究会(6票)の上位3研究会に記念品が贈呈され、懇親会の終了とともに、無事、地域コーナーでの意見交換もお開きになりました。



表彰される名古屋地域

今回、開設した地域コーナーについて、来年以降どうするか、来年以降も開催するとしたらどう改善したらよいのか、会員各位におかれましては、

色々ご意見があると思います。今回の地域コーナーに対する感想や意見に耳を傾け、よりよい地域間連携のあり方を考えていきたいと思っています。

3 理事会報告

【第34回理事会】

第34回理事会は第10回総会資料についてメールによる会議が行われました。

発信月日：2006年9月14日(木)

(1) 議題

- 1) 平成17年度事業報告、決算報告
- 2) 平成18年度事業計画、予算案
- 3) 規約改正

「規約改正」は山岸会長の公約を受けて幹事会から提案されたもので主旨は以下のとおりです。

『選挙制度あるいは信任投票制度の新設ではなく、総会に定足数を設けて(書面(委任状)を含めて1/5以上)、会長・副会長・理事・幹事等役員の選任のみでなく事業計画・予算の決定等、他の議題も一定割合の正会員により決議する。』

(2) 意見

1)平成17年度報告及び2)平成18年度計画については予備費の差異について質問があったが説明により了承されました。

3)規約改正については定足数の1/5の根拠について質問がありましたが、同規模の学会の例に倣ったとの説明で了承されました。

【第35回理事会】

月日：2006年12月9日(木) 10:00~12:30

会場：利根川歴史研究会会議室

出席：山岸、谷田、辻本、沖野、古川、森下、江崎(幹事長) 奥村(事務局：記録)

書面による意見：荒井、角野、竹門、春田、森
欠席：近藤、大村、島谷、鹿野、福岡

[議事内容]

第33回・第34回の議事録を確認した後、以下の議事が進められました。

(1) 報告事項

1) 会員状況

学生会員の入会及び卒業後の会員継続の勧誘を図る必要があるとの指摘があり、現会員に勧誘戴くこと、会費請求に併せて卒業生の就職等に伴う移動先の連絡をお願いすることから始めることになりました。

2) 活動報告

地域活動が活発であり、富山、東北のワークショップと現地見学会は各々約 130 名参加、福岡の事例発表会は 103 名の参加で、いずれも農水産分野や富栄養化などにテーマが拡大し、産官学が一体となり熱心な議論が交わされていたことが事務局から報告されました。

3) 大矢暁理事ご逝去

大矢暁理事が 11 月 13 日(月)20 時過ぎに急逝(享年 74 歳)されました。平成 13 年度応用生態工学会監事に就任されて以降、経営者としての経験、地球科学的な視点から学会運営に貢献戴いておりました。自然に対する探究心、広く・深い見識、現場優先の行動力等など技術者としての範を示してこられた大矢さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

(2) 検討事項

1) 第 11 回(2007 年度)大会計画について

第 28 回幹事会の提案をもとに、他学会の開催予定や名古屋大学の行事予定などを勘案して、第 11 回(2007 年度)大会計画は下記のとおり決定されました。

場所：名古屋大学

日時：9 月 15 (土) -17 日(月)

実施体制：辻本副会長を中心として進める。

2) 三学会合同大会について

第 28 回幹事会で検討した下記の 2 点の取組方針がおおむね了承されました。ただし、国際英文誌 (LEE) や日韓交流の経緯と現状を幹事長が確認し、その上で進めることとする。

- ①前向きに取組むこととし、3 幹事長間でフレームワーク作りに臨むのがよい。しかし、とりあえず、試行として行なうこととし、現時点で恒久的に行う事を決めるものではない。
- ②幹事長間でのフレームワーク作りが進み、実行に向けて行動する場合は交流委員会に移行するものとする。

3) 10 周年記念号(Vol.10 No.1)について

広告掲載については、2004 年度発行の会員名簿作成時にならって依頼方法、費用などを検討し進めることが承認されました。とくに、依頼先を年度内に決定するため、2007 年 1 月に依頼文を送付する予定で進めることになりました。

4) 2007 年度役員改選(選挙制度の改正)について

2007 年は役員改選期に当たることから、第 28 回理事会(次期役員候補選考制度：ニュースレター No.29 参照)と第 34 回理事会(規約改正案)の論議をもとに検討され、下記 3 点の決定及び意見がありました。

- ①第 10 回総会で規約改正【総会は正会員の 1/5 の出席によって成立する】が承認されたこともあり、前回(2005 年度)と同様の方法で役員改選を行うことにする。
- ②大会の委任状をどのようにして集めるか、定足数を満たすかの話があり、往復はがき、メールなどの方法を検討する。
- ③将来的に、例えば選挙管理委員会を設ける等の検討が必要ではないかとの意見があった。

5) LEE 編集事務局の依頼について

LEE 編集事務局からの依頼について検討し、下記の 3 点について承認されました。

- ・応用生態工学会代表理事として廣瀬前会長に代わり現学会長の山岸氏を推すこと
- ・中村太士氏が LEE の編集委員長 (editor in chief) に就任すること
- ・浅枝氏が LEE の副編集委員長に就任すること

6) 認証評価専門委員候補者推薦について

(独)大学評価・学位授与機構からの依頼について検討し、応用生態工学会からは役員・委員を中心として 10 名の方々を候補者として推薦することに決まりました。

7) 提案・その他事項

- ・委員会活動の活性化
大会時は必ず委員会を開催すること、関連する委員会の共同開催することを委員長に依頼する。また、とくに若手のコンサルタントの参画について検討する。
- ・情報サービスの向上
2007 年 1 月予定の委員会で「魅力あるホームページの充実」について検討された方策をもとに今後の取組みについて検討する。
- ・技術士の部門として【応用生態工学】の新設を働きかける。
- ・会費納入時に寄付を募る方法を検討する。
- ・学会誌への「新博士紹介コラム」新設を会誌編集委員会に検討を依頼する。
- ・情報サービス委員会と LEE に関わる担当役員は、山岸会長が選任する。

(3) その他

次回理事会日程：5月中～下旬

議題(予定)：

平成18年度報告(事業報告、決算報告)案

平成19年度計画(事業計画、予算案)等

とした。

場所：(未定：麴町付近)

主な議題：次年度大会について 等

4 幹事会報告

【第27回 幹事会】

日時：平成18年9月29日 12:05～13:00

場所：東京大学農学部1号館 地階生物実験室

出席：江崎、熊野、内田、加賀谷、風間、鎌田、
関根、高野、星野 島崎(事務局：記録)

欠席：岩崎、清水、角、日置、萱場

[議事内容]

山岸会長から幹事会を活性化するようにとの命題が与えられている。着実に実行して行きたいとの挨拶が江崎幹事長からあり議事に入った。

1) 総会報告事項・審議事項について

(総会での説明を参照のこと)

2) 各委員会活動報告

①編集委員会：幹事会後に拡大編集委員会(東大弥生講堂：9月29日18時～)を行う。

②普及委員会：実務者が気楽に学会活動に参加できるようにすること。活動への積極的参加を促すためのインセティブ(例えば土木学会CPDへの相乗り)となるように資格制度も考えたい。

③交流委員会：海外派遣者の選定を行った。

④情報サービス委員会：ニュースレターの発行に合わせて委員会メーリングリストにより情報を収集し様々な分野の情報を紹介した。HPの改善・充実が課題と考えている。

⑤パートナーシップ委員会：具体的活動無し。

⑥将来構想委員会：担当幹事選定中のため報告無し。

3) その他

①【趣意書】の原案は江崎幹事長、熊野副幹事長、鎌田幹事、萱場幹事の4名で十周年記念東京大会を踏まえて作成する。

②平成19年度大会は名古屋を候補地として検討中である。

③次回幹事会日程

次回理事会日程が2006年11月末頃と想定し、多くの幹事が出席できる日を後日決めること

【第28回 幹事会】

日時：平成18年11月9日(木)15:00～17:00

場所：利根川歴史研究会会議室

出席：江崎、熊野、加賀谷、関根、萱場、高野、
星野 奥村(事務局：記録)

欠席：岩崎、清水、角、日置、風間、鎌田、内田

[議事内容]

1) 10回大会を振り返って

- ・高円宮妃久子殿下を名誉総裁としてお迎え出来たことは良かった。
- ・研究者とコンサルが一体で実行できたが、加賀谷氏に依頼ごとが集中した。学生アルバイトは良く活躍していた。
- ・迅速な決定のためには大会会場である大学の教授クラスの参画が必要である。
- ・初日(金)午前10時からでも参加者は多く特に支障はなかった。
- ・ポスター発表は交代制が守られていなかった、熱心な議論を妨げない配慮をしつつ指示を徹底する必要がある。また、審査には時間が不足である。
- ・地域コーナーは好評であったが、名産品に目をうばわれ地域活動に関する意見交換が少なかった。

2) 第11回大会(2007年：平成19年)について

- ・場所：名古屋大学
- ・月日：他学会との重なりを考慮して9月中旬から10月中旬を候補とする。
- ・実施体制：辻本副会長が代表となり名古屋周辺の学会員で実行委員会を組織して頂くようお願いする。
- ・シンポジウムテーマ等：実行委員会に委ねる。
- ・第10回大会は[10周年]ということもあり幹事会が全面的に実行委員会を担ったが、次回第11回大会は同様とはしない。

3) 趣意書原案について

- ・2007年4月初めを目指して、将来構想委員会との連携を考慮しつつ、江崎幹事長、熊野副幹事長、鎌田幹事、萱場幹事が相談して作成する。
- ・10周年記念東京大会のシンポジウムでの論議を踏まえること。

- ・記述事項(キーワード)：地球温暖化(IPCC・水循環等)、国際的(日中韓交流)、他学会との交流・連携(三学会長懇談)、地域連携(パートナーシップ・市民参加)
- ・追記：第10回大会記念特集号については、広告掲載をお願いし“寄付金”を募る。そのためには、年度末決裁を考慮して1~2月までに依頼する必要がある。

4) 三学会合同大会について

- ・前向きに取り組むこととし、3幹事長間でフレームワーク作りに臨むのがよい。しかし、とりあえず、試行として行なうこととし、現時点で恒久的に行うことをきめるものではない。
- ・幹事長間でのフレームワーク作りが進み、実行に向けて行動する場合は交流委員会に移行するものとする。
- ・他学会との連携は基本的に賛成であるが、戦略的行動が必要である。「川という線から水田という面への展開」が、たとえば必要である。
- ・海の研究が少ないとの意見があり、セッションを作れば人が集まる可能性がある。

5) 委員会活動状況

(1) 会誌編集委員会

- ・10周年記念特集号(Vol.10 No.1)の予定記事について(5.委員会報告(1)参照)

(2) 情報サービス委員会

- ・ホームページ(HP)の充実(魅力ある内容とすること)は急ぐ課題であり、また、外部委託の検討等を推進するため担当幹事による牽引が大切である。

(3) 交流委員会

- ・活動の活性化のため3つの提言があった。

- ① 役割の明確化、特に、普及委員会との仕分けをする。
- ② 目的の明確化、年度、5ヵ年等“ある期間内”に何を達成するのか
- ③ 委員会の活性化、各委員の意識向上のため多くの委員の出席を促す。

- ・交流委員会は地域(普及委員会マター)で出来ない全国レベルの研修等を行う。

- ・国際(海外派遣)と全国レベルの研修が役割である。なお、日韓交流は、学会間交流となるように中村委員長に仕組みの整理をお願いする。

(4) 普及委員会

- ・11月6日(月)に開催した委員会の概要(相談

役候補者と窓口名称、CPD情報、ポスター・キャッチコピー原案)について報告があり下記の意見交換があった。

- ・目的と手法を整理する必要がある。
- ・各地域の基盤ができつつあり、当委員会の初期の役割は低減しているが、地域実行委員会の相談窓口を務める必要がある。
- ・学会活動が学究に片寄りすぎ、事業者からの生態系に関する問題の相談がしづらい状況にある。
- ・他委員会(交流、パートナーシップ、情報等)と連携が必要である。

(5) パートナー委員会

- ・パートナーシップ委員会は、交流委員会から分岐し、その役割は市民・住民との連携である。
- ・各地域実行委員会が活動する中で、住民・市民との連携を図って行くことが期待される。

(6) その他

次回幹事会は2007年4月15日以降を予定する。

5 委員会報告

(1) 平成18年度第1回拡大編集委員会

日時：平成18年9月29日 18:00~19:00

場所：東大農学部弥生講堂会議室

出席者：浅枝、井上、鎌田、古川、尾澤、五道、清水、島谷、中井

[議事内容]

1) 編集状況の報告：査読期間の短縮をはかるために、担当編集委員への事前確認を徹底する。

2) 特集記事

- ・進行中特集記事：

生態モデル特集(浅枝委員長担当)4編をVol.9 No.2を目標に編集中

水際特集(島谷委員担当)今年中に5編が投稿される見込み

- ・新特集記事の企画：

目標2007年9月までに全論文の投稿修了

ダム下流特集(担当：清水委員)

自然再生特集(担当：鎌田委員)

執筆者が決定次第、編集委員宛にメール送付を行う。

3) 応用生態工学、Vol.10 No.1(10周年記念号)について

予定記事を以下のように定めた。

- ①3 学会会長座談会記事 (担当:鎌田委員)
- ② トクナーさんの講演記事 (担当:中村圭吾氏に依頼)
- ③ ディスカッション記事 (江崎幹事長にまよめの執筆を依頼する)
- ④ 5 パネラーの記事 (担当:島谷委員)
- ⑤ 川那部初代会長基調講演記事 (担当:江崎幹事長)

4) その他

編集委員の交代の必要性が生じたときの措置として、規約4条に以下を付加することを理事会に提案する。

編集委員会で必要と認められた時には、任期途中においても編集委員を追加することができる。その任期は編集委員会の任期とする。

(2) 普及委員会

月日:2006年11月6日(月)14:00~17:00

会場:利根川歴史研究会会議室

出席:星野担当幹事、橋本、佐渡、澤、細井、古川、若尾、高橋 (事務局) 奥村

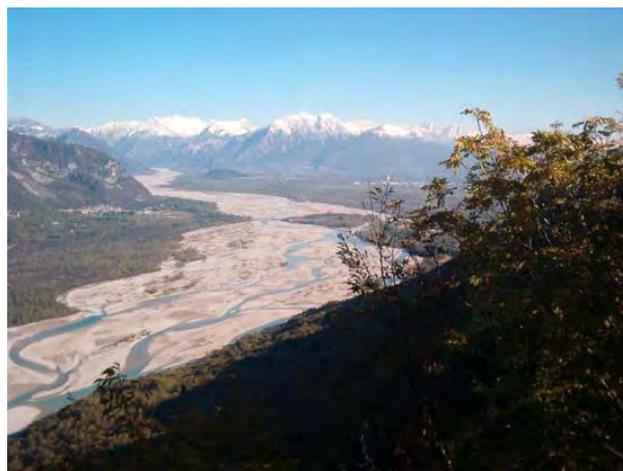
意見提出:岩瀬、山根、原田

[議事内容]は第28回幹事会報告参照

いに参考になると考えられます。

2) シンポジウムでの発表内容

シンポジウムでは、河川復元を進める上で、研究成果と現場をいかに結びつけるか、またその重要性について、スイスやイタリア(タリアメント川)の事例を中心に説明いただきました。スイスでは、ローヌ・トゥールプロジェクトの結果、河川復元の評価のためのハンドブックが出版されています(文末参照)。



タリアメント川(イタリア) (提供:トクナー博士)

6 クレメント・トクナー博士、

日本滞在報告

中村圭吾(土木研究所)

応用生態工学会の10周年記念シンポジウムの招待講演者として、EAWAG(スイス連邦水圏科学技術研究所)のクレメント・トクナー博士が、2006年9月27日~10月5日まで日本に滞在されました。トクナー博士の研究・発表内容ならびに現地視察の様子などを簡単に報告いたします。

1) クレメント・トクナー博士の研究概要

クレメント・トクナー(Klement Tockner)博士は、河川生態学の研究者として世界的に知られています。河川生態学は stream ecology と呼ばれるように小河川における研究がほとんどですが、博士はアルプスの原始河川と呼ばれる変動の激しい大河川タリアメント川で調査を実施し、多くの研究成果をあげていることで有名です。網状河川における河川生態学の第一人者といってよいでしょう。大井川や黒部川など日本には多くの網状河道がありますので、博士の研究は日本の河川管理にも大

3) 現地視察&研究交流

①多摩川視察

多摩川では、河川生態学術研究会の調査地であり、河原の自然再生を実施している永田地区を訪問しました。永田地区については、筆者と共同で執筆した日本の河川復元の論文にも取り上げたこともあり、大変関心を持っていただきました。また、多摩川の上下流交流など、NPOの盛んな活動に大変興味を持っておりました。

②北海道視察(釧路湿原、苫小牧演習林)

北海道では、中村太士先生、河口洋一先生らの案内のもと、釧路湿原、釧路川の自然再生、苫小牧研究林などを視察しました。初日は、釧路湿原を視察した後、旧川復元を計画している茅沼地区などを見学しました。

その後、河川生態学の分野で国際的な成果をあげている苫小牧研究林を訪問しました。苫小牧研究林は、陸域生態系と河川生態系の関係を定量的に明らかにした調査地として国際的によく知られています。トクナー博士も論文ではよく見ているものの、現地でははじめてであるため大変感激していました。現地では、村上正志先生を中心に、研

究について熱い議論が続きました。研究林のゲストハウスに宿泊したのですが、夜になってもトクナー博士は、研究室に入り、学生や先生方と研究内容について、飽くことなく議論を続けておりました。教育者としてのトクナー先生の熱意には一同脱帽しました。



苫小牧演習林での村上正志先生(右)との熱い現地ディスカッション

4) EAWAG のすすめ

以前にトクナー博士の元で研究させていただいた縁で、今回の滞在の世話をさせていただきました。トクナー博士は、日本の研究レベルを高く評価しており、今後も積極的に日本の若手研究者を受け入れるとおっしゃってくださいました。海外での研究を志す会員の方々にはぜひ、ぜひ挑戦してみてください。

参考 URL

EAWAG:

http://www.eawag.ch/index_EN

タリアメント川における研究:

http://www.internal.eawag.ch/~tockner/research/tagli_main.html

河川復元評価のためのハンドブック(ドイツ語):

<http://www.wsl.ch/land/products/rhone-thur/erfolgskontr/docs/erfolgskontrolle.pdf>

7 行事報告

(1) 北陸現地ワークショップ in 富山 報告

応用生態工学会富山 佐渡 正
(館下コンサルタンツ株式会社)

2006年10月20・21日に、第5回北陸現地ワークショップとして「里地・里山のいのちを育む技

術をめざして～森と水の生きもののために～」を富山市において開催しました。

本学会は、従来は水域、とりわけ河川とそこで影響を受ける生物や生態系の問題を取り扱う傾向がみられます。しかし、本学会の目標とするところは河川や水辺だけに限りません。そこで今回のワークショップは、人の生活と身近な地域である里地・里山全体を保全するという視点から企画しました。そのため、ここにおける環境の問題は地域の人々の生活や生産活動と深く関わってきます。地域の人々との関わりに大きく焦点を当て、小河川や用水とこれにつながる水田を保全・再生していくという大きな課題に関連して、4題の講演をいただきました。また、近年里山や近郊においてツキノワグマやサルによる被害も問題になっています。この問題の一因に、里山が放置され荒れてきていることがあるとされています。応用生態工学の面からも里山についてどのような取り組みが可能か、必要なのかということも重要な課題であると考えられます。この観点から里山におけるさまざまな取り組みの実践例や問題点、野生動物との付き合い方について、基調講演を含めて3題の講演をいただきました。

20日の現地見学会には36名の参加があり、先ず「国指定天然記念物」かつ「国内稀少野生動物植物種」に指定されたイタセンパラの再生への取り組みとして、生息地・保護池を見学しました。

イタセンパラは日本固有の純淡水魚で、淀川水系・濃尾平野・富山平野(現在では氷見市内の一部の小河川)の3地域に飛び石状に生息しています。生息する万尾川を見学し、生息密度が極めて

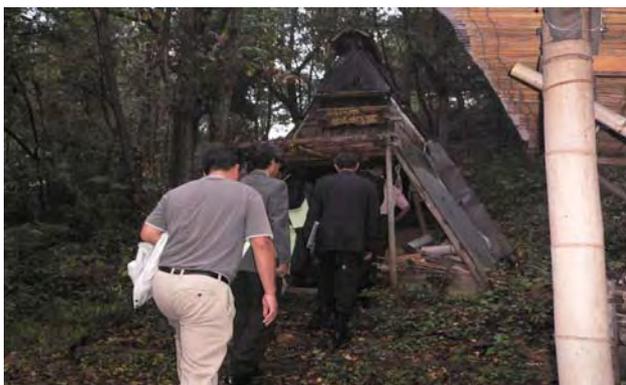


イタセンパラ保護池

高いこと、反対に地域の人々により河川改修の要望も多く生息に配慮しながら、また地域の人々の

理解を得ながら改修を進めていることが紹介されました。平成15年度より飼育を開始し、保護池において17年度には自然繁殖が確認され、現在では個体数が増えすぎ固体が小さくなってきているため保護池の拡張や野生復帰を検討中とのことでした。

次に、里山の状況と取り組みについて富山市ファミリーパークを見学しました。里山の荒廃とこれを再生するための手掛かりとなる地域の人々と一体となった取り組み(竹林整理、炭焼きなど)を紹介していただきました。



炭焼き小屋

午後6時20分より、別会場にて34名の参加により交流会が行われ、玉井前副会長の挨拶から始まり、あちこちに人の輪ができて活発で和やかな意見交換会となりました。

翌21日は、127名の参加のもとワークショップが開催され、以下の7題の講演をいただきました。

1)「田園地帯におけるイタセンパラ再生への取り組み」 (氷見市教育委員会 西尾正輝)

イタセンパラの淀川外の現状と氷見地区における現状と取り組みについて、昨日の現地見学会に続いてさらに詳細に説明されました。地元住民に対する普及啓発活動と、今後の野生復帰に対する思いを熱く語っていただきました。

2)「浅井地区の豊かな水環境を守り、伝えて」

(浅井水環境保全協議会代表 田中久雄)

射水市浅井地区において地域住民・自治会を主体に「浅井地区水環境保全協議会(通称水ネット)」を設立し、地元浅井小学校と一体となって地元の誇りである庄川の伏流水を守り育むための数々の取り組みについて紹介されました。絶滅危惧種であるトミヨや天然記念物のアシツキなどを育み、小学校のグラウンドにビオトープを手作りしたり、浅井ミニ水族館の創設運営・藻刈り十字軍などがあり、これらの事例を「世界水フォーラム」など

に発表するとともに「水環境保全功労賞」「ココロ環境教育賞」など数々の賞を受賞されています。

3)「生態系に配慮した農業水路工法の開発」

(福井県土地改良事業団体連合会 田谷哲也)

農業水路における生態系回復を目指して三面張水路における魚巢樹の開発、及び小規模で急勾配に対応した新型の魚道の研究・開発について発表していただきました。魚道は新開発の「双翼型」の隔壁を有するもので、他の隔壁形状が20~40%の遡上率を示すが、双翼型は50%程度の遡上率を示し、また1/5~1/3の急勾配でも高い遡上率を示すことを報告されました。魚巢樹(おさかなステーション)は土砂の堆積や魚の定位状況を実験により評価し、樹の形状を決定、そして現地において実証実験を行った結果、樹内は対象区の14倍の生息密度を、また越冬も確認されたということでした。

4)「人工産卵場の造成による魚道に代わる生態系保全の取り組み」

(神通川水系砂防事務所所長 萬徳昌昭)

学会第10回大会において発表いただきました人工産卵場(口頭発表10-1~3)について、その後の状況と詳細な報告をいただきました。人工産卵場は自然の産卵場より発眼率が高く、かつ既往の人工産卵場の成績よりも良かったことや、その後の稚魚の調査の結果、また餌の状況など詳細に説明いただきました。

5)「里山・人と自然の変化」

(富山市ファミリーパーク園長 山本茂行)

近年、熊の出没と人身事故の多発状況について、その原因を山の変化と人の変化という2つの視点から解説していただきました。山の変化は放置された山里が自然復帰し、野生動物の生息環境が拡大した。また、人は自然と無縁な生活をし生き物としての人ではない生き方をしてきた。そして過疎化・高齢化により里山が無人化してゆく中で、今までの農林業・行政では限界である。対策として野生動物の存在・生息が自然を維持してゆく上で最もローコストであり、昨日見学した富山市ファミリーパークにおける「市民生きものメイト」による里山再生の取り組みや、里山と都市間の人と物と情報の持続的循環システムの構築を目的とした「きんたろう倶楽部」などを紹介され、その中で自然教育の大切さを述べられました。

最後に、里山を再生する技術の開発を当学会に期待していると締めくくられました。



山本茂行園長の講演

6) 「ダム建設によるニホンザルの生息環境の変化と保全」 (富山県立雄峰高等学校 赤座久明)

富山県内のニホンザルについて、ミトコンドリアDNA変異調査より得られた分布特性より県内のサルは河川流域毎に分布が局在し、河川沿いに群れの分裂と共に拡大していったこと、また河川付近の環境がサルの採食地として極めて重要な価値があることが紹介されました。宇奈月ダムの工事開始から完成後数年を経過した現在までのサルの群れへの影響は、川原の砂利採取に伴うアキグミ林の消失をきっかけに始まり、ここに生息していた群れは下流へ移動し上流から別の2つの群れが降りてきて定着した。湛水が始まってから移動ルートが失われ左右両岸を均等に利用できず、2つの群れは行動域を下流へ広げていった。この実態を踏まえ国土交通省と協議し、サル用吊橋(2005. 7、ニュースレターNo.30、p6-7に詳述)やアキグミの植樹などの復元事業を行った。しかし、以前のような左右両岸を均等に利用する様子は見られず、人為的に元に戻すことは難しくダム湖出現前に対策をとる等、生息環境の復元事業の時期が重要と訴えられました。また、サルによる農作物の被害対策として氏が考案された行政に頼らず自作可能な安価(費用 600 円/m)で簡単な簡易電気柵を紹介され、その普及活動に力を注いでいると報告されました。

7) 「野生動物医学と環境デザイン」

(福島県鳥獣保護センター所長 溝口俊夫)

福島県鳥獣保護センターにおける野生動物病院と(社)福島県獣医師会による野性動物ERドクター制度、そしてNPO法人WCS(ふくしまワイルドライフ市民&科学者フォーラム)の協力体制と

活動について紹介いただきました。特に、WCSの以下の6つのチームの特徴ある活動についてエコロード計画や福島県における熊の調査状況などをGIS・リモセンを駆使して解析していると報告されました。

総合討論では、富山県立大学高橋剛一郎助教授を座長として、活発な議論が行われました。

まず会場からの質問に対して講演者に答えていただきました。印象深い議論としてこのようなものがありました。なぜ人に害を与える動物を保護するのかという基本的な問いに対し、それらの動物を全て駆除することではなく、共存の方が環境に対しても人間活動に対しても最もローコストであるといった、実務(利?)面からの回答もなされました。

議論では以下のように多くのことが語られ、充実した討論となりました。実績のない試みにおいては実態をみながら柔軟に対応を行っていくという、いわばアダプティブマネージメントのアプローチが欠かせないこと、問題の実態を的確に捉えるには大がかりなアセスメントの手法ではなくより地道な調査が必要であること、また対策においては高齢者にも容易に理解できるようなやさしい方法や操作が重要であること、有効な技術を開発してもそれを共有させていくことがより重要であること、その意味でローカルな問題・技術を全体的な問題・技術とどのようにつなげていくか、そのシステムが重要であること、地域の住民に問題意識を持ってもらうことが大切で、その意味で環境教育、特に子供を含めたそれが重要であること等々。



総合討論(壇上の高橋座長と各講師)

最後になりましたが、本ワークショップにご協力いただいた会員、北陸地方整備局、富山県、(社)北陸建設弘済会の方々に厚く御礼申し上げます。

8 会誌編集委員会からのお知らせ

(1) 会誌 (Vol. 9 No. 2) 発刊

平成18年12月20日に発刊された会誌 (Vol. 9 No. 2) の目次を紹介いたします。近日ホームページには摘要も掲載いたしますので、身近な方々に紹介し入会を勧めて下さい。

<原著論文;6編>

- 岩木晃三・佐藤宏明： 渡良瀬貯水池における水位低下・干し上げと鳥類個体数の動向
 藤村善安・富士田裕子・加藤邦彦・竹中 眞・柳谷修自： 湿原における植生 - 立地環境の関係解析のための水位環境指標値
 金澤康史・三宅 洋： コンクリート基質 - 自然基質間における河川性底生動物の群集構造の比較
 渡辺恵三・中村太士・小林美樹・柳井清治・米田隆夫・渡邊康玄・丸岡 昇・北谷啓幸： 河川の階層構造に着目したサクラマス幼魚の越冬環境 - 越冬環境を考慮した川づくりの提言 -
 柳井清治・河内香織・伊藤絹子： 北海道東部河川におけるシロザケの死骸が森林 - 河川生態系に及ぼす影響
 宮本 康・國井秀伸： 汽水湖中海における塩分変動に応じた水質と沿岸藻場の変化

<事例研究;1編>

- 松井 明・佐藤政良： 水田小排水路における水路構造が水生生物に及ぼす影響

(2) 記念特集号 (Vol. 10 No. 1) 記事募集

応用生態工学会10周年記念特集号にトピックス的な記事を募集いたします。会員の皆様からの想い出話、活発な地域活動、新たな取組み等寄稿をお待ちします。原稿は2007年2月上旬を目処に浅枝会誌編集委員長までお送り下さい。また、執筆要領は投稿規程に従ってください。

9 新任ごあいさつ

事務局長 奥村興平

前号のニュースレター (No. 34号) で島崎前事務局長からご紹介いただいておりますが、10周年記念東京大会が開催された10月1日に事務局長に着任いたしました。応用生態工学に関しては門外漢ではありますが、本学会を築いてこられた諸先輩のご指導を頂き、より一層社会貢献度の高い学会活動のため微力ですが堅実に精一杯尽くしたいと思っています。不慣れのため不行き届き

が多く会員の皆様にはご迷惑をお掛けすることがあるかと思いますが、ご支援・ご助力を宜しく願っています。なお、事務局は東京の第一地・麹町4丁目であり、12坪の部屋で執務しております。近くに来られた機会には、お寄り戴き新鮮な知見をご提供下さい。

10 新刊紹介

「HEP入門<ハビタット評価手続き>マニュアル」 著者：田中 章

HEPとは“Habitat Evaluation Procedure”の略で、「野生生物の生息環境としての適否という観点から、生態系を総合的に定量評価する手続き」のことです。本書は、『HEP入門』ということで、HEPの基本をわかりやすく紹介しています。まず、HEPの理念、適用の対象や条件、HEPの具体的な手順 (マニュアル) を説明し、次に米国でのHEP誕生の背景、米国での適用事例 (マティリハダム撤去と生態系復元プロジェクトに伴う環境アセスメント) を紹介しています。続いて、日本におけるHEPの適用状況及びその課題を提示し、最後に例題を設けられています。

(朝倉書店編集部 太田さんの寄稿を一部修正)



【出版社】	朝倉書店
【価格】	4,500円 (消費税別)
【サイズ】	A4判変形
【ISBN】	4254180268

11 今後の行事案内

今年度の学会主催の行事はほぼ終了いたしました。共催行事を紹介します。

・汽水域国際シンポジウム 2007

「汽水域の再生とその持続可能性 - 宍道湖・中海の賢明な利用にむけて -」

日程：2007年1月26日 (金) - 28日 (日)

会場：くびきメッセ国際会議場 (松江市)

[2006年12月12日現在会員数]

正 (学生) 会員	1,213名
賛助会員	53法人 (81口)